明治大學 學生新聞
月刊（毎月30日）￥30
©明治大学学生新聞編集部
編集・発行・学生団体＝明治大学学生新聞編集部・編集室・東京都千代田区神田駿河台（328）8054
独立記念号

独立宣言

愚挙への嘲笑・編集者の闘争

'67・1 明治大学学生新聞 編集部総会報告

明治大学学生新聞編集部は、明治大学学生会中央執行委員会から独立するものであることを、「学生新聞」本来の機能に照らして主張し、ここに宣言します。

本紙は明治大学唯一の「学生新聞」です。編集部は学生大会の基本的な方向性にもとづき、常に全学生相互のより有機的な対話をよびおこそうと、さまざまな問題の提起に努力してきました。けれども、それがすでに禁忌とされるような状態に、明治大学学生会は陥ってしまったのでしょうか。学生会中央執行委員会による本紙一四四号弾圧事件は、まさにこの疑念を裏づけるものでした。

昨年一〇月二九日付本紙一四四号は、われわれ編集部員の氏名を詐称する学生会中執委員数名の手によって、印刷所に刷りあがった直後盗まれたのです。当時は、学費値上げ問題が現実化し、阻止闘争もようやく昂揚をみせてきた段階にあり、一四四号は当然〈学費〉の本質的究明を中心として編集されたのでした。こうして発行されようとした一四四号の廃棄処分が、こともあろうに学生会の執行機関によってなされたなどということを、われわれはどうして信ずることができたでしょうか。しかし、すべては明らかになりました。利敵行為は、翌日、中執からの「通達」が証明したのです。それはわれわれ編集部に対し、一四四号の廃棄処分、現編集部員全員追放、部室即刻明け渡しを迫るものでした。破廉恥にも「中執決定」として。しかも、執行機関にすぎない中執は、この一方的決定を、直後の学生大会にも計らず、いまだに公表をさけ、事実を隠蔽しているのです。

編集部は、まさに学生自治の自爆ともいうべきこうした愚挙について、数日にわたる討議を行いました。学生新聞は、全学生によって組織されている学生自治体＝学生会のなかで、その全成員に対話を提供していくという任務を、編集者と読者学生会員との責任のもとに、づねに貫徹していかねばなりません。そして、それはいかなる代理執行機関の従属下にあるものでもなく、純粋に、独立した機能を不可欠としているものです。編集・発行権が編集部に属すべきことは、学生自治体の進歩的性格からも、完全に自明のことがらであります。

われわれの討論は、従ってほぼ次のように結論し、今後の方針とすることになりました。

明治大学学生新聞は、学生新聞本来の任務にもとづき、すでに学生自治体の執行機関としての能力を喪失している学生会中央執行委員会にはもとよりのこと、他のあらゆる組織機関に従属するものではないこと、ならびにもっとも基本的な拘束を学生大会の方向性に負うにすぎないことを、あらためて確認する。今後もなお新聞を発行していくための経済的保証その他については、学生新聞に関する問題の全面的な再確認が学生大会においてなされるよう、読者学生会員諸君に要請するとともに、それまでは編集部員の活動によって発行業務の継続をはかっていくことを確認する。学生会中央執行委員会に対しては強く猛省を促す。

全国学生新聞編集者への挨拶

革命的学生新聞論を構築し全学新三分化をゆるすな

本紙の独立にあたり、全国の学新編集者に挨拶を送る。

全学連の三分立は、いま全国学生新聞連盟の三分化をひきおこそうとしている。われわれは学生新聞が全学生の創造運動のなかで占めるべき役割りを再び確認せねばならないだろう。それは新聞一般の機能ではなく、まさに「学生新聞」についての確認である。

そして我々の基本的な立脚点が、全国学生の自己主張にあることをまず確認する。編集者は単に教条的アジテーターであってはならない。大衆社会状況といわれる現象のなかに、教条のアジはなにも機能しえないのだ。だから問題は「教育者であり、アジテーターである」という古典的テーゼを、われわれ学生の非教条的、非集中的精神状況のなかでいかに理解するかにある。

日本学生運動の戦後の出発は、全大学の進歩的学生の胎頭にはじまった。そしてその組織機能にもとづき、学生新聞はさまざまに規定され、おおむね自治会の宣伝を目的として学生新聞は発行された。けれども、まさに現在、学生運動の創造的発展のために、われわれ「学生新聞」編集者はその主体回復を余儀なくされている。それは学生運動のあらたな転換に照応した要請である。反宣伝反スタを標榜する組織機関がその主張スターリニストの体質を具現したり、また全学連が二〇年の歴史的逆行をひきおこしたりすることが、あたかも当然のごとく語られる現在、学生新聞は完全に独立せねばならないだろう。

編集者は読者との相互の協働作業を欠いて存在しない。「学生新聞」は、学生自治体が成員の主体性を代表し、より高度な発展を導くために、その客観性の保証を自らに負うものである。

だから、「学生新聞」が保持すべき学生の自己容観性をわれわれは主張する。われわれ学新編集者は、三分化への危機に晒されている全国学生新聞連盟を、すくなくとも内部から崩壊させるようなことをしてはならないし、編集者としての努力によって学生運動の真の発展のために寄与するものであることをここに確認しよう。

明治大学学生新聞編集部

前号にひき続き、学費斗争の原理構図をさぐる意味から、本稿は斗争視点の再生についてその根底を究明する。ここに編集部のうけた実践的要請は、学生としての自身に対する検証への糸口である。それはこの斗争における徹底抗戦の論理を導く。斗争は自己の参画が何を意味するかを知りえた者の行動である。斗争を学園占拠→学園自主管理→奪取の構図に据え、入試阻止、学費不払斗争まで進捗せしめねばならない。それは学生の可能性を、いま、問うている。

大学を半身不随に、そしてバラバラに！

おれたちにはそれしかない……

自己権力を確立……

学生はなにができるか

ひとりは、ひとりの宣言を！

ふたたびあの退屈な日日に戻るのか

編集部

学園闘争の復権

学年末試験ボイコットの最終的戦術にむけて急速な高揚を示している明治大学費値上げ阻止闘争は、全学園の学生自主管理をめざす学園占拠闘争として冬期休暇を経過し、昨年七月前期試験繰りあげ実施以来の立ち遅れを一挙にとり戻す気運にある。

しかし忘れてはならない。明治大学でのこの闘争に先行して闘われた幾多の学園闘争が学生側の絶対的敗北を記している以上、教訓とは闘争視点の全面的な転換を意味するのである。敗軍は、より徹底的な敗北の経験によって、より多く学ぶことができる、という。

ここ数年の間、日本全土を学園闘争のるつぼに叩きこんでいるその要因は、敗戦直後の学園民主化闘争が日本学生運動を成立せしめた時点に照応し、全学連三分立のまま固定化するに至った現在の学生運動のふたたびあらたな転換期をついに準備した。

戦後学生運動史上かつてない広範な規模でのこの学園闘争の勃発は、すでに闘っただけの敗北を記している。それは戦後学園闘争史上に、一貫した学園闘争敗北史となって流れている宿命の、爆発的表現でもある。こうして学園闘争はいま復権を主張しているのだ。

たしかに数年来、おびただしい学園闘争に、学生の闘うエネルギーを確認することはできた。「反対」「阻止」のエネルギーは、けれども「創造」の概念を欠落したまま集約され、それぞれに敗北の一途を辿っていったのである。しかも体制の大学に不可欠な厚生保護的安全弁の役割まで負わされ、きわめてスマートに敗北しさった例もすくなくない。

それら累積される総敗北の根本的な要因が学生運動に占める学園闘争の位置にかんする認識に負うものであることを、まず指摘しよう。過去二〇年の間、学生運動は学園闘争を、一貫して街頭闘争に従属するにすぎないカンパニア闘争と把え、むしろ〈物取闘争〉としての条件闘争をより体裁よく〈政治闘争〉へとすりかえる方策に血道をあげた。すべての学園闘争はこうしてそそくさと街頭に流れ、左翼的[illegible]になびく根無し草を群生させたのだった。まさに戦後学生運動の〈栄光〉である。

そしていま、運動はモメントを見失っている。輝ける〈栄光〉の故に……。

しかし変革へのモメントは実在する―図らずも全国の学園を闘争に駆ったものとして実在せずにはいなかったのである。

学生層の自己点検

一連の学園闘争は、自身が一定の枠に規定された労働者となるほかないことを知っている学生たちの、いわば日常的エネルギーによって「闘争」となりえたのだが、それは同時にひとつの漠とした方向を、すなわち創造を希求する衝動の一挙的噴射としての自己表現を、めざしている。従って、それは体制への反逆を意味するが、即目的に反権力であることはできない。エネルギーとしての反体制はチャチな政治図式によって短絡していくことすらいとわない、純角的な方向性をもつにすぎないのだから。

学生層のもつこの様な内在性がより強靭な論理をもつためには、その成立根拠が明らかにされなくてはならない。

現代では、大学そのものがすでに極度に体制内在化されている。大学は、大衆社会状況を不可欠とする現体制の、故に一層徹底的なイデオロギーの砦であり、生産管理・運営研究所、労働者養成所である。そうでなくては昔のズイまでマスプロ化された現代型の大学が〈教育〉制度に存立することはできない。そして大学は、あらゆる体制内諸制度のうちの、とりわけ[illegible]の部分である。体制[illegible]学に、学問研究は、単に支配構造の合理化を追求する道具にすぎない。変革への衝動の不断の抑圧としての〈学問技術〉化により、ようやく成りたつ虚構が学問を幹細し、研究を標榜するのである。知能認識行為の有機的共働作業たるべき教育は、そして、二重の虚構に包囲されている。集団思考という高度な認識手段を、体制の教育はついに無機的統制思考導入のために転落させてしまう。

同時に労働者階級全体の知的向上を、没主体的にではあるが、従って絶対的な変革へのモメントを用意する形で生みだした。学生はみずから滅びゆく階層として、教育・学問研究の未来を導入しなければならない。学園闘争はそこに闘われる。学園をめざすわれわれ学生の、大学における、体制との闘いである。

阻止の原理とたたかいの展望

学費値上阻止闘争

"バリケード防衛"を短期決戦へ

運動のモメント

学生層の内部に累積されていく変革へのモメントは、暴発するリアクションである。上層エリートの養成とともに、一定の労働力を確保するためになされた大学の量的増大は、学生層の膨大化をして

大学群の変質経路

焦点を学費値上げ問題に絞り、問題としてのあらたな質と、更に現存する阻止のエネルギーの組織化の方向について考えていくことにする。

〈学費〉はそれ自体に意味をもたない。常に、そしてことに現在それは大学の自己展開方向性と深く関連している。故に学費問題を含めたいわゆる〈大学問題〉が、何にゆえ現在―六十七年に至る数年の間、すべての大学の問題とならざるをえないかは、まず今日の日本資本体制の擁する緊急の課題に照応した、各大学の自己展開方向性の問題として把えられなくてはならない。

六〇年前後を基点とする日本資本体制の国家独占としての完成は、また貿易為替自由化という世界資本体制の歩調に同調することを余儀ないものとした。それは労働力市場との関連において、現在の大学教育内容の全面的な改編に踏みきらせ、日経連の「人的能力開発」にかんする教育への要請という形でその端初を切るものであった。

「要請」は全大学の四階層分断を提案する。①これまでの個別大学―個別企業、産学協同路線を国家独占の技術開発的リーダーにまで高めるための理工学パイオニアの先端的養成。早大理工学部大学院＝大学構想として現実化する。②それにともない一層複雑化する国家管理を担当するに足る官僚養成。東大法学部五年制構想に端を発した旧七帝大再建構想。③統制的教育にあたる教員の統制的養成。法制の側面を教員免許法改訂、大学設置基準改訂省令化に委ね、一般総合大学での教員養成を締めだすとともに、現存の教員養成系大学への集中攻撃。横国大学部名称変更がすでになされた。④実務管理担当者養成〜下層ホワイトカラー大量養成。この腑分けが大学問題の主調音である。

そしてこれら一連の大学再編成のなかに、明治大学を含む数多くの総合大学部は、当然④に示される部分の膨大なホワイトカラー労働者養成所として位置する。現体制イデオロギーの幻想的にないてであり、しかし何の保証もないホワイトカラー。ブルーカラーと同位相の下層労働者養成所である。

入口のピークにあったことはそれぞれの私立大学のなかに二つの大きな政党派閥的潮流を確立させずにはおかなかった。大学の現体制との明確な照応にもとづく、自己展開の方向性の内部分裂である。明治大学の学費値上げ問題において、それは典型的にあらわれている。

〈理事会主流実権派〉・松岡（前法学部長）を中心とする。明大出身教授が母胎。明大の今後について教育理念を校歌以上に提起できず、法律専門学校当時の「名声」に執着。その[illegible]

明治大学派閥抗争

教育制度の全面的転換期が受験[illegible]「大明治構想」の一端として生田への農工学部移転を計画し完敗したが、性懲りもなく「名門」明治を夢想する。現在まで明治大学の主流派であるがゆえにマスプロを信じて疑わず、「毎年小巾値上げ」を主張する意図は膨張過程でできた赤字補填にある。

〈反主流専教連スト派〉麻生（大学院院長）が唱導。三〇年学園民主化専教連ストでのしあがった新人派、東大出身者が母胎。近代経営者的感覚によりこの制度的転換期を察知、新明治構想を提携。その保証を受験生の増大＝大巾本増し入学で一気に乗り切ろうとし、今後の明治を実務労働者養成中心に考え、その限りでの名声にすがる。少数派。明治大学新聞に拠点をおき、十年計画で明大乗っ取りを志ざす戦後派評議員を結集させている。

さしずめ古典派と未来派とのこの対決は、両派のもつやみがたい値上げへの焦燥により、松岡派が麻生派の改革案を大巾にとり入れざるをえない状態にあって、両派統一戦線を創出した完璧な強硬路線である。

こうした全体的状況を前提として、学費値上げ阻止闘争の方法論へと視点を移せば、まず大学の自己展開過程を学費の側面から切断し、現存する大学の機能を無効化することによって、学費に体現された方向性を絶息せしめるところにその先端は据えられる。われわれは教育・学問研究についての自己のもつ未来像を広範に顕在化させ、底流するエネルギーの創造的な発展を、組織的裏づけのもとに確保せねばならない。（二面へ）

狼作戦＝当局が画策

スト攪乱ねらう

体育会殴り込みはデマ

現在、バリケードは「狼論争」でもちきりである。それは二五日団交直後、二六〜二七日に体育会がスト破りの殴り込みをかけてくるというもので、全学闘、文連、全二部共闘など諸組織は、おびえたり力みかえったり、およそ騒然とした様相を呈している。

しかし、一・二〇団交での体育会反主流派（柔道部、相撲部）の動きや、団交以後の学生全体の動きを総合して考えれば、その信憑性は極度に薄弱である。そして、その情報経路が体育会とその周辺に端を発していることも、それを裏付けている。

もとより、体育会はOB会＝理事会の動きに敏感に即応する。当局の意のままに、体育会はいつでも私設学内暴力団となりうる存在であるが、その意図とは何か。

ストライキや内容の脆弱性は、当然かれらにもわかっているであろう。大学新聞講読部が大きな役割を果している。そして、早大体育会の二の舞いを踏んで体育会を孤立させ、無効化してしまうほどバカでもあるまい。

噂が、たとえば現実化したとしよう。ところで、彼らはますます孤立していくだろう。そのための積極的工作を、かれら自身の手で作りだすなどということ、まして「体育会がスト解除した大学を当局に献挙する」などということは、まったくありえない。理事たちが〈良識派〉ぶりを発揮していたことからも、それはできないだろう。

これら一連の噂は、故意に、しかもそれによってひきおこされる戦線の内部分裂を意図して流されている。「時がすべてを解決する」という理事者たちの確信にはより大胆な方針提起をもって反撃に出なくてはなるまい。

流れ

▽二〇日、延べ人員一万をこす学生が集まった記念館団交は、ひどかった。全会場の三分の一ば、確実に体育会と覚しき「優等生」。ヤジの声量も、あたりまえだが、彼らは抜群だ。大学の学生だということを気にせず、草野球の応援でもするつもりでいると、一番気が楽になる。

▽だが、理事者たちのアジテーションはうまい。論理性など、ないのがあたりまえで、わたしたちは喧嘩相手に同調したとする必要はまったくない。私設暴力団体育会に拍手され、激励され、背後からの援後を強く自覚して、ある理事などは声を震わせ、元気いっぱいに叫んだ。「私は、みなさんに週一辺、会うのが楽しみで生きている……」長く、末永く生きようとすることは、あなたの勝手だ。しかし大学と養老院とを区別もせずに、恥しげもなく大衆の面前で独白さながら絶叫するなどということを、あなたは長い間の生活で知ったのだろうか。老いぼれ万才！とでもいおうか。

▽みじめな老人が、ことさら若者の間に割り込み、教訓でも一丁、という気持は、よくわかる。実にくだらない。

▽さながら拍手・発声合戦のようなこの団交、しかし学生の大部分は、自身の代弁者をどこにも見出せず、いささかのとまどいをみせながらも静かに、その異和感にひたっていたのだ。そして、この潜在性こそ学生の闘争力を底部から支えるに足る、殆ど唯一のものであることを、知るべきなのだ。

▽大学当局は過日学生に郵送したパンフで明大構想の明確な二分化を図らずも露出してしまった。問題は、なるほど教育全体に及ばざるをえないかもしれない。だが、いま、わたしたちの考えなくてはならぬことは、この明治の教育の問題であり、学費値上げをいかに阻止し、明治の全面的な検証に焦点をあわせるかということである。

▽闘いは、学生の無気力、無関心と呼ばれる精神状況を、そのまま闘争力とする方向で集約され、開放されなくてはならないだろう。闘争は、なにもなさず、もう終わろうとしているのだろうか。おもしろくない。

編集部員募集

百万学生の自巳主張紙めざす

本紙編集部は、学生会中執からの独立を確認し、学生の創造性の問題に正面からとりくむ〈学生新聞〉を追求しています。学生の自己主張紙として読まれ、書かれる新聞に本紙を育てるために、あなたの新鮮な感覚が必要です。不断に、強靭な思想を獲得しようとするあなたを、編集部は歓迎します。

〈募集要項〉対称・明治大学一〜二年在学者
採用人員・五名／〆切・二月末日
応募者は本校記念館奥の神田編集室までおいでください

明治大学学生新聞 編集部編集局

経済書―― 専門書―― 文苑堂書店 神田駿河台下（291）8771 8786

■総合出版カタログ送呈■
江戸後期の詩人たち 富士川英郎著 B6判上製四〇八頁 ￥1600
日本詩の自覚の歴史に江戸期漢詩人の系譜がある。本書は、リルケ研究家の有数な著者が語る史伝文学で、十八世紀後半から約百年の漢詩文学の系譜がはじめて展望される。
論集・小林秀雄 第一巻 編集＝大岡昇平・篠田一士・吉田熈生 A5判上製四六四頁 ￥1800
第一巻（大正十三年〜昭和十年）小林秀雄研究必読文献集■小林秀雄論・批評と反響・書評及び収載作品評・小林秀雄の横顔・年度別評壇展望■
麦叢書 立原道造の生涯と作品 田中清光著 B6判二三四頁 ￥730
堀辰雄論 小久保実著 B6判二五八頁 ￥680
麦書房 東京都世田谷区代田4〜37〜12 振替東京42611 電話（322）4601

好評発売中！
高野秀夫著 区会議員一年生 ―生活につながる政治―
東京の僻地といわれる江戸川区の近代的町づくりのため区会議員として東奔西走する元全学連書記長の発言集
江戸川区民新聞社 東京都江戸川区平井10ノ1770 振替東京43676

本誌は新聞の秀れた記事によるニューズ・ドキュメント！
新聞月報 時事問題研究の基本誌
毎月15日発売 定価220円（〒18）・見本〒18円
世界の現状を正しく掴み、将来への予想と見通しをつける為に。
●大学生の教養誌 広い視野と国際感覚を養い、マスコミの伝える世相や世界の動きを正確に捉えうる。
●最高の資料誌 調査、研究、その他レポート、卒論作成の資料。
●就職―時事問題の最良解答書 この問題には絶対強くなり、自信がつく。
バック若干在庫
東京都千代田区内幸町・幸ビル12号 新聞月報社 （591）1681・8092 振替東京44832

弘文堂 東京神田駿河台
法律学講座双書 全21巻
憲法 鵜飼信成／新版行政法（上）（下） 田中二郎／物権法・担保物権法 吾妻光俊／民法総則 舟橋諄一／親族法相続法 新訂版 有泉亨／債権法 吾妻光俊／商行為・保険・海商法 鈴木竹雄／商法総則 石井照久／手形法・小切手法 石井照久／新版会社法 鈴木竹雄／強制執行法・破産法 兼子一／民事訴訟法（上）（下） 菊井維大／刑法 改訂版 団藤重光／国際法概論（上）（下） 高野雄一／国際私法 江川英文／労働法 石井照久／法哲学概論 碧海純一／刑事訴訟法 平野龍一／要説憲法 鵜飼信成／要説民事訴訟法 兼子一／要説行政法 田中二郎
経済学全集 全12巻
経済政策論 宇野弘蔵／経済学史 舞出長五郎・横山正彦／新訂版労働問題 大河内一男／日本経済史 土屋喬雄／現代経済学 古谷弘／財政学 大内兵衛・武田隆夫／国際経済論 矢内原忠雄・楊井克巳／金融論 鈴木武雄／統計学 有沢広巳・内藤勝／欧州経済史 大塚久雄／マルクス経済学 鈴木鴻一郎／続マルクス経済学 鈴木鴻一郎
民事裁判の研究 岩松三郎 550
裁かれる裁判所 フランク著（上下）古賀正義訳 各550
日本の労働法 松岡三郎 450
アメリカ行政法 シュオーツ 和田英夫訳 750
債権各論 中村吉三郎 450
民法（全） 野田孝明他 650
現代家族の研究 小山隆 1200
日本官僚制の研究 辻清明 420
近代ヨーロッパ政治史 岡義武 350
ラスキの政治理論 渋谷武 350
日本都市の発展過程 矢崎武夫 1300
アメリカ新聞の生成過程 内野茂樹 1200
日本の革新勢力 田口富久治 380
イギリスの政治 木下広居 280
現代の経済学 清水川繁雄 430
現代の論理学 宮崎允胤 350

一・二八団交へのアピール

本日団交に集まった諸君に、本紙編集部は声明する。

われわれ明治大学全学生の学費値上げ阻止のたたかいは、いま試練の時を迎えている。

大学を奪取し、学生層を廃絶する闘いに後退はありえない。

われわれは問題を「教育」全般におしひろげ、分ったような気になってはいないだろうか。明治大学での闘いは、明治大学において貫徹されない以上、学園闘争の全国化などありえないことを忘れてはいないか。視点を学費値上げ阻止からそらすことは、現在武装解除を意味する。阻止の前提のうえにクラス・サークル・ゼミのあらたな編成と、学生自己権力の確立を不断に追求しよう。

闘いは、四年生の戦線離脱を認めてはならない。（農民も闘うのだ！）明治大学の教育体制の教育を否定したものが、どうして〈入試験〉だけは別だなどというのか。

絶対的闘争力の裏付けのもとに、四年生全員卒業保障、バリケード確保、学年末試験ボイコット入試阻止、学費不払までの永続的なプログラムを確認すべきだ。当局の大学改革案を認めてはならない。

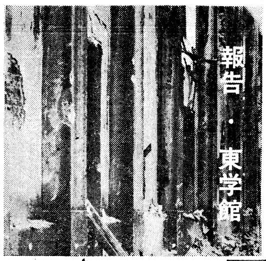
それは学生自治の破壊である。全学生が闘争力として自己形成するための組織が、学生会、学苑会、文連の広範な連帯にもとづき作られる必要がある。そこに全学生はもはや代表を必要としない。システムは学生の直接的自己権力に高められなくてはならない。

学費阻止を大前提とした討論をまきおこそう。全学生がたちあがり、学園自主管理を実質的に確保するなら、学費は阻止できる。一部の進歩的な教授はすでに学生との連帯行動をおこしている。そして日共党員教授は、逃げた。教授のこの闘いへの参加は、自らの免職を避けることができないことを知りつつ闘う教授たちを、われわれは知っている。

学費阻止を基点として大学を全体的に検証しよう。

なにもせずに、単なる学園占拠闘争で終ることは、われわれ学生の敗北、〈変革〉の堕落だ。大学があり、学生が存在する以上、学生層の内的矛盾に基点をおく闘いは終わらない。われわれはその一歩をいま、踏みだすのだ。学費は阻止できる。

編集部編集局



報告・東学館

されど戦闘的コンミューン……

東学館の蘇生は可能か

東学館闘争委員会明大支部

機動隊二千名、執行吏百名、学徒援護会職員百名、装甲車十台、放水車数台、ブルトーザー二台、日通トラック十数台、クレーン車二台。

十一月二十日早朝、旧江戸城北ノ丸一帯は、これらの国家暴力装置によって、平常の閑静さを打ち破られた。第二次大戦で日本が敗北に至るまで、権力の中枢部として存在し続けたこの九段代官町の地は、戦後復員学徒によって、一切の権力の介入を排した"平和の砦"として二十年の苦難の道を歩んできた。東京学生会館の歴史は真に闘いの歴史であり、とりわけこの二年有余に渡る闘いは、拠点防衛の抵抗闘争として熾烈な権力の弾圧を排して闘われてきた。

大管法の流産以降、学寮への攻撃は、新寮建設と引き換えに寮規則の改悪（二四時間教育を目論む権力統制）を押し進めるものであったが故に、我々には、より強固な組織を背景とした不退転の闘いこそが要請されていた。全国寮生が、文部省の攻撃の前に激しい抵抗を続けながら、拠点の抵抗闘争に終らなければならなかったことを考える時、全寮連書記局を握る民青諸君の"新寮獲得闘争"が無内容な空文句に過ぎず、全国的闘いを叫び続けながらいかに多くの寮友諸君が権力の前に屈せざるを得なかったかを痛苦をもって思い浮べることができる。

全国の闘う寮友が、文部省に対する総反撃の闘いの必要性を痛感すればするほど（七・四全寮連大会）、現在の全寮連の方針と運動を批判せざるを得なかった。

東学館守る会と新寮協議会（東学館、医歯大学生寮、東学大雄進寮、お茶大山寮）の結成はこのような状況の中にあって「抵抗から反撃へ」と戦線を拡大するための重要な橋頭堡であった。

十一月十九日夕刻、極秘裡に進められていた東学館強制執行の陰謀を探知した館生は、直ちに全都学友の支援を要請するとともに、徹夜でバリケードの構築をいそいだ。しらじらと夜が明ける頃、やっと築き終えたバリケードの中で深々と煙草を吸う間もなく、レポーターからの報告「千鳥ケ淵、科学技術館前、パレスサイドビル前に機動隊待期、総勢二千」。本部のマイクからは、刻々と入る情報が報告され、時計はすでに七時をまわった。早速弁護士に連絡、しかし電話線は、何者かによって切断されていた。

八時半、機動隊二千、機械力部隊の暴力装置を背後に控えた執行吏が、マイクで強制執行を通告してきた。我々は「弁護士が到着するまで執行を延ばすよう…」要請したが、彼らは直ちに機動隊に実力行使を命じた。

三百名の館生と百五十名の支援部隊は、トビ口を手にバリケードを壊す機動隊に一歩もひるむことなく対決した。それは真に血みどろの闘いであった。

正面からの攻撃が、我々の果敢な戦闘によってはばまれるや、機動隊は、各個室の窓をぶち壊して中へ乱入した。机の上に広げられたままの本やノートが散乱し、フトンや衣類が泥靴で容赦なく踏みつけられる。イサイかまわず襲いかかる暴力団によって、或る者は頭を割られ、鼻血を出し、或る者は腹を蹴り上げられてその場にうずくまる。それでも館生の抵抗は続いた。

闘うこと二時間、闘い続けた館生及び支援の学友は、遂に田安門から追い出されてしまった。

執行吏は直ちに荷物の梱包をはじめ、その夜から徹夜の取り壊し作業がはじまった。

十一・二〇闘争は、真に血みどろの闘いであった。にもかかわらず、我々には決定的な情勢判断の誤りがあった。機動隊の導入は、四十年十一月にかけられた「現状保全の仮処分」に関する個室点検のために行なわれるものだという半分タカをくくった判断がそれである。誰一人として、東学館から追い出されるまでは立退き強制執行であるとは信じていなかった。我々が、もし三、四日早く強制執行の情報を察知していたなら、機動隊を一歩も近づけることなく東学館を守り通したであろう。

三百名の館生は、着のみ着のまま木枯しの吹きすさぶ街頭に投げ出された。騒音と暗燥の中で異和感を覚えながら、状況から疎絶された自己にじっと耐え続けていかねばならない。

東学館の闘いは、生活とイコールであった。たとえ、"仮想"であろうと、それは、コンミューンの一形態を実相として持ち続けてきたといいうるであろう。〈F〉

戦線

学年末試験延期の告示まで至った学費阻止の闘いは、明確なる方針をもてぬまま、つぎつぎと発せられる大学当局の先制攻撃のなかに晒されている。

当局は、郵便物による大量宣伝を、ストライキ学内占拠突入以来、継続しておこなっている。そのなかで、もっとも新しい一月二〇日前後配布された印刷物に、もっとも顕著なかたちでストライキに対する当局の対策をみることができる。「重ねて学生諸君に告ぐ」と銘打った学長及び総長、短大学長の文書と「理事会の方針に関して」という理事長の文書で、当局はストライキの長期化には苦情を述べながらも、何ひとつ解答せずにいる。

理事長の「方針に関して」に書かれていることは、ストライキという事態を利用して以前の経営方針をより徹底しようとする態度である。

「近来の経済事情の変化、科学技術の進歩、教育の大衆化」のなかでの本学の「困難な財政的事情」を前提に、まず①「学長を中心とする英知」をあつめることを提案する。学費に関しては「困難な財政的事情」を訴えるのみ。②教授、研究者の待遇改善、研究条件の改善。③教員数、学生数の是正。両者の話しあい。④経営面での職制の確立と合理化。⑤学生との「話しあい」を促進する。

②項は一見前進のきざしがあるが、このストライキの代償として、いままでの教授との不満をやわらげ、学部単位の切りくずしへの支援にすぎない。教授らの待遇給与の改善に反対するものではないが、このストライキの代償としてそれがだされることに対しては、行為の卑劣さかげんを知っておく必要がある。

当局の大学改革案
戦線分断と職制強化
—1/20 パンフ—

③項は、これこそ当局からの妥協案かとも思われたが、同時に配布された学長短大学長の連名文書には、それを裏切るように「本学においてここ一〇年来、量より質へという方針のもとに、一方においては、学生定員を目標に、他の大学でみるような、いわゆる大量の水増し入学はこれを行なわず、入試に際しては寄附その他一切の情実をみとめず、専ら学業成績のみによって合否を決定し」と、まるで現実と逆な事実を大言壮語し、さらに学長は続ける、「なお教員と学生との接触を一層緊密なものにするために、ここに新たにアドバイザー制度の実施を提案した。これは学生が学部・学年にとらわれることなく、自分の尊敬する教員のもとに集り、そのアドバイスを受ける制度であって、これを通して教員と学生との接触、学生相互の交遊をはかり、人間形成に役立たせようとするものである」

これは教授と学生の接触を名目に、教授の労働強化によって第二サークルの結成をうかがうものでしかない。現在あるサークルの発展の方向においてその努力をしなくてはならないことは、サークル員の自ら知るところである。

そして最後の問題は①項と同じく「促進」を主張するもので学費を一体どうするのかの問いに答えるすべを知らず、「財政的困難が現にある以上、誰が何と云おうと値上げはする」以上の意図をみることができない。

結局理事長文書は、学生にとって「わが明治大学」の空想的自己満足を補足するもの以外でない。

学生は教育の有機的発展を主張するとともに、その問いが学費の恒常的な値上げから出発し、その出発を潔く棄てて闘っているのではないし、そうであるなら闘いは着実に敗北していくことをすでに知っている。

写真は、明大学費闘争二〇日のデモ

学園人民管理は幻想か

横国大清水ケ丘の経験をとおして

戦闘の立脚地

ここ数年来、全国の大学でおこっている学園紛争は、横浜国大の学部名称変更反対闘争、早大の授業料大巾値上げ反対闘争などに続いて、いま明治大学でも学費値上げ白紙撤回闘争が闘われており、現在、学年末試験の延期という事態をひきおこし最終的な局面をむかえている。

全学ストに突入してからすでに五〇日以上を経過しスト突入と同時に学生自身の手による大学の自主管理という従来の学園闘争の形態とは違った新しい戦術を提起してはいるけれども、いったいこの自主管理とはどういう内容なのだろうか。私たちは先の横浜国大の闘争の中にひとつの形態を見い出すことができる。

清水ケ丘を支えた力

七〇日以上の長期にわたる闘争期間のうち五〇数日間を教授の学内立入りを阻み続け、学生が自らカリキュラムを作成し、それに基づいた学園管理を行ったこの闘争は、教授会の一方的な学部名称変更決定に対して学生側が反対したのに端をはっしている。自らの運命を決定するにあたって、自己と無関係なところで自己の運命が決められてしまっている疎外感が教授会へ激しい怒りをもって爆発し、その回復を試みるべく運動体へと転化したのであった。こうして学生の各体意識を心理的な側面とし、また地方ではこのような学生の意識を指導部が有効に組織化なし得たということをその組織的側面としていた。

このような二つの側面に支えられて自主管理という闘争形態は維持されていったがこの学生運動史上はじめて登場してきた自主管理という学園闘戦の戦術は、その対決者として教授会を実体を形成してゆく作業として進した闘争のパターンとして大学のコンミユーン化を意図とする自主管理が幻想的にではあれなされたことは注目に値する。

自主管理の実体は自主カリキュラムであり、その具現化がバリケードであった。しかし、バリケードだけでは自主管理コンミユーンというものが成立し維持されるわけではない。その

……現在、慶応大学で行なわれている学生自身の手によるカリキュラム編成運動などのように、今……

自主管理の確立

……自主管理の思想。それは大学からの自立であり、学生の主体であることを確認することであり、客体の立場からの立場への回復をはかるのであった。……

全国の学園闘争

「弾劾」「阻止」では不充分
創造的学園闘争を

この二三年、大学は学園闘争の渦中にいる。そのことは、もはやジャーナリズムが教育ブームと呼ぶだけではすまされぬものが胎動しつつあるといえる。

慶応、横浜国立、高崎経済、中央、早稲田、そして明治において、これら関東において闘われてきた学園闘争をみてもその性格は、それ以前の闘争と明らかな違いを見せていることに気づく。

政府の文教政策に対して、もはや弾劾や阻止のみでは闘いが組めぬことに気づきつつある。慶応、横浜国立のカリキュラムの作成による闘いそして自主管理の闘いは、教育の根本方針に対する学生自身による構築である。

さらに立命館から端を発し、中央、明治ら全国に起り、起ってきた学館の完全自治への闘いは、学生が大学の中でどこをよりどころとし、立ちあがろうとするかという教育の根本理念に対する、学生自身による一つの提出であるといえる。この新たな教育理念へ胎動は、今後、学部、生寮やゼミ、サークルらの方向性、及びさらに学生会館のより完全自治への模索をたどっていくにちがいない。そして大学を、これまでの学問のためとか産学協同路線にもとづく社会に役立つ学問のためでもない、大学の新たな性格を形成していくだろう。知識人ではなく労働者にならざるを得なくなった学生の、いかに社会に参加していくかを探求する場となろう。それをここで労働者教育への模索と呼んでもいい。

労働者教育、教授らの古い学問の場としての大学から訣別していく。そして、大衆カンパニアに終始していた学生運動を政治を労働者教育の場にいかに定着させていくかを実践する学生運動に転換させていかざるを得ない。それは学生運動を四年間の闘いから、長期的闘いに移行せざるを得なくなるだろう。

自己充足にあえぐ

柴田・高橋・真継の文学

文学状況

中川芳秋（遊民文学会）

「されどわれらが日々」以来、「憂鬱なる党派」「光る声」と、大学でかつて政治に生き政治に身を接触してきた者たちが、現在、その政治にどういう態度をとってしまっているかを問いつづけた作品がベストセラーになり、それに近い好意をうけた。

しかし、私はこれらの作品が、やがて抹殺されるのをのぞんでいる。

政治的立場とか、政治的意義においてでなく、文学作品として私はそれをねがうのである。たしかに「されどわれらが日々——」には安保闘争やその他の闘いのなかで敗れてきたものたちに安らぎとかすかなのぞみを与え、「憂鬱なる党派」にはその戦後というものが開かれずに死んでいった類い抗議をそのすぐれた構成力のなかに認めうるが、しかしそれは自己完結化のなかにあり、自己満足で終っている。

文学には自己完結はありえぬし自己満足もありえない。ただ落にとらえきれぬ政治のなかに住まざるをえぬ人間の未完結があり、それゆえに文学は未来からの透視力を持ち、政治とそれをとりまくあらゆるものをこえることが可能になるのである。

その意味において「されどわれらが日々」は他の同様な作品より文学としての秀れた作品となっている。

今日「憂鬱なる党派」などが評価されてはいるが、一方で文学の利」と銘打ったが、ここに自己完結文学の居直りをみる。一体、人間の生活、及び体験が静的にとじこめられた時に、何が人間に残されるかを考えるとき、人間は死ぬほかにないことを江藤は気づかなかったであろうか。文学は現実即物主義でないというなら分るが又、文学はその時代からのがれられぬことも知らねばならない。

井伏鱒二の「黒い雨」が昨年度最高の作品だと多くの職業評論家たちに讃美されたが、その評価の方向は江藤淳に代表されているとみることができる。江藤は「黒い雨」が現実を文学の中に静的に閉じこめることによって「文学の勝が、それはあくまで不毛な土壌での相対にすぎない。

低滞が叫ばれる根源はそこにありそこに巣喰っているかぎり、低滞は続くといわねばならない。

具体的作品に即していえば「憂鬱なる党派」は西村のかっての仲間が病死し、自殺し、渡米し、結婚してしまい、西村自身最後まで内容を記すこともなかったカバンと共に死んでしまう。ここには高橋和己の中に生きていた政治の死命をみる。高橋は再びこの種の作品は書かないだろう。

「されどわれらが日々——」は唯一、節子への甘い期待を保留しているが、柴田翔は、そこに満足し、死んでいる。

「光る声」は、認めがたい組織のなかの生きかたを、しかし耐えねばならなかったという松本を描くことによって、真継伸彦は絶望し、そして満たされている。

私は思いだす。「暗い絵」の殉教者でも背教者でもない、第三の道を、模索することによって、絶望を絶望として認めえなかった敗戦直後の野間の姿を。そして「文学の勝利」という自己完結を、絶望のかもしだす現実に絶望できない状況に自己を追いこんでいくことのほか、文学の低滞からはい出す道のないことを。

研究者のなかに、結婚のなかに静的に完結されていく高橋和己の生を知らせ、内なる政治への訣別宣言しかない。そして、灰のなかに

〈お詫び〉人と思想は都合により休ませて頂きます。

学生独裁の論理

学園奪取のために

1面より

われわれ学生の闘いが常に拠点とすべき現実的母胎であって、単なる手段ではありえない。手段であるならばそれは学園占拠にすぎないのだ。

学園自主管理闘争の成立は、従って、まず学生全体に変革の衝動の不断の再生を導くためのシステムの成立である。闘争は、学問研究・教育の創造的機能を、学生の主体において回復し、制度による教育の分断支配を止揚する。学生の層としての廃絶を意味するこの闘いは、日本資本体制の中枢部を侵蝕し、すべての人間の学問教育を必要とする方向をめざす闘いである。

学園闘争は大学の学生自己権力による実質的管理＝奪取をめざす闘いである。学園占拠闘争として闘われている現在の阻止闘争は、さらに財政、カリキュラム編成にかんする学生のヘゲモニーの確立学生自治権の〈実質的〉確立、そして同時にサークル・ゼミの有機的再編成として実現されなくてはならない。学園自主管理というコンミューンとなることはできない。そして過去の明大学園闘争敗北の記念碑・学館、健保、生協における学生官僚システムの破砕を、それは意味するであろう。学園自主管理はわし、学生の恒久的拠点としなくてはならない。

学園占拠を学園自主管理に転化

（了）

ルポ（12月）—横浜国立大学

炬火は消えたのか

冬期休暇を目前にひかえた一二月、編集部は横浜国立大学清水ケ丘校舎を訪れた。

約一年前、そこに成立したという「学園自主管理」闘争の、これまでの軌跡と、それがもたらすはずだったあらたな日常の内実を知りたいというのが、たっての希望だった。ひとむかし前の人民管理闘争方式をごく当りまえのように連想しながら、こまごまとした民家のたちならぶ路地をぬけ、ダラダラ坂をのぼりつめると、そこが清水ケ丘だ。なるほど「現地」と呼ぶにふさわしい。旧制の名残りで、静閑な、高所趣味がしみついている。

本館の裏手には見はるかす空地。プレハブ教室が続々と建てられるという。同大新聞会のある木造サークル小屋の隣りもプレハブ。なんだ、と聞くと、音楽教室だという。あきれる。ここから何千人もの教員が生まれるのだ。

〈教員養成系〉大学はいったいに、ほとんどこのような条件下にある。きわめて劣悪な教育条件、これも質実剛健とかの名残りか。

ともかく、そういうところだ。それは人民管理の亡霊の、なるほど見舞いそうな感じに満ちている。

学部名称変更に端を発したこの闘いは、当時、他大学からの支援をまったく受けることがなかった。一方では都学連大会のために奔走し、一方では早稲田に総動員されていたからだ。こうした孤立のなかで、闘争指導部は分派間の抗争による闘争の自己分解の危険を極度に避けた。広範な全学統一戦線と、それに伴う民青の無力化は明らかだった。

問題は「自主管理」だ。この果敢な、いささか語呂のよい闘争「名称」は、何を生みだすことができたか、いや、確認できたかとでもいえばよいのか。

そしてそれは、石女的闘争戦術でしかなかった。当時の闘争委員長三戸部君は確認、強調する。以後の闘争終結は、したがってきわめて順調なものとならざるをえなかったのだ。この戦闘的戦術は、そして学部名称変更を阻止できなかった。

闘争は終わって、そこには学生・教授友好戦線的な精神風土が確認されたにすぎなかったのか。無意味とはいうまい。横国は、たとえ反帝教育闘争の図式の上にであろうと、それは学園闘争の個別的深化の貫徹を、示唆したのだ。これがわれわれ学生の「一歩」となるにはまだ時間がかかるだろうか。

はやくも、明治大学ではそれを「無害化」してしまったのだから……。

◉古書販売◉
亀山書店
明大前すずらん通り
電話（三二八）八〇五四

サービスをモットーに御奉仕を心掛けています　☆盟食会☆　盟食会加盟店共通の割引券を御利用下さい

中華そば　明和軒
喫茶とお食事・二階喫茶　あけぼの
軽食・中華そば　煉生堂
生そば・蒲やき　松泉食堂
洋食の店　もとはし
大衆食堂　美味しい洋食の店　ふじや食堂
大衆天婦羅食堂　江戸一
中華食堂　栄楽
ムードのあるコーヒー店　キムラ
中華そば　明大軒

民主主義科学者協会編著　￥.100
全国の学園闘争・その原理的考察
うちつづく敗北史を一身にうけて、明治大学学費斗争は、いま、斗われている。日本学生運動の転換期としての絶対史的敗北をつぶさに書き記し、なお、今後の学生運動再構築のための原理的考察をしつつ、鋭く現状況を拓く問題の書、遂に刊行！（近日発売）
明治大学学生新聞編集部　発行
東京神田駿河台1—1・（328）8054

運転免許証は在学中にとりましょう
卒業すると忙しくなります

公認　京王自動車練習所
井の頭線・京王線明大前駅となり
TEL（328）0191

年中無休で……ご用命承っております。

三割引〜五割引〈消費者の店〉をご支援下さい

カラーテレビ大特売

型名	まや特価	現金正価
16型 ゼネラル CKB型	九万八千円	（一六九、〇〇〇）
三菱 三九五型	十万五千円	（一七五、〇〇〇）
サンヨー 三〇〇型	十三万五千円	（一九八、〇〇〇）
19型 東芝 WF型	十四万五千円	（一八三、〇〇〇）
ナショナル 九一〇A型	十四万五千円	（一八五、〇〇〇）
ビクター 五〇六型	十四万五千円	（一八三、〇〇〇）

一流メーカー最新型　テレビ大特売

19型テレビ

型名	まや特価	現金正価
NEC G一	三万九千円	（五八、八〇〇）
ビクター 四六〇	四万二千円	（五七、〇〇〇）
三菱 四八〇	四万二千円	（五九、八〇〇）
東芝 EB	四万四千円	（五九、八〇〇）
日立 七八T	四万三千円	（五八、八〇〇）
ナショナル 九二S	四万七千円	（五八、八〇〇）

16型テレビ　2万円台突入

型名	まや特価	現金正価
NEC A七	二万九千円	（四九、八〇〇）
コロムビア Q七	三万二千円	（四八、八〇〇）
シャープ F二	三万二千円	（四八、二〇〇）
富士電機 六二R	三万一千円	（四八、九〇〇）
ナショナル 六三M	三万七千円	（四八、九〇〇）
三菱 七八〇	三万三千円	（四八、九〇〇）
日立 一六T	三万六千円	（四九、五〇〇）
東芝 RH	三万四千円	（四八、九〇〇）

12型テレビ　2万円台突入

型名	まや特価	現金正価
富士電機 P六	二万六千円	（四二、七〇〇）
ゼネラル PX	二万七千円	（四一、〇〇〇）
サンヨー P七	二万七千円	（四〇、三〇〇）
シャープ K二	二万八千円	（四〇、三〇〇）
日立 一〇〇〇A	三万円	（四二、七〇〇）

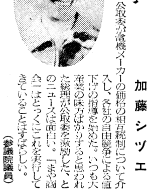
冷蔵庫大特売　五年間無償保証付
冷蔵庫は、品質、性能、耐久性、デザインなどで一流会社の製品にさほどの優劣差はございません。三万円台のものがお買得といえます。
ご家庭用一〇〇l高級型

型名	まや特価	現金正価
富士電機 一一三型自動霜取	四万円	（五八、五〇〇）
東芝 一二〇SY型	四万九千円	（六一、二〇〇）
日立 一一二五型	五万円	（六一、〇〇〇）

テレビのアフターサービスについて
☆一年間は無料で二年目からは有料です。
☆ご使用三・四年目にブラウン管を、お取りかえになるとき
14型ブラウン管　三千五百円　お取かえ工賃共（一年無償保証）
◎テレビの修理は　安定度を高め、寿命を長くするために熟練技術者にご下命ください
（四五二）四八一一（代）まや商会　技術部　営業部

洗濯機・掃除機・暖房機　ステレオ・テープレコーダー　大割引特売
★無料配達　テレビ・冷蔵庫・洗濯機・ステレオ・ルームクーラー
◎毎日10方面別に配送車が出動いたしております
①平塚〜小田原　②横須賀　③川崎　④相模原　⑤八王子　⑥川越　⑦大宮　⑧越谷　⑨柏　⑩千葉　都内全域

まや商会は公正取引の模範
加藤シヅエ



◎地方販売
国電田町駅前0分（改札直前）
まや商会
東京都港区芝五の三四の一四
横浜店　横浜日ノ出町駅前ビル
振替（東京）七七六五〇